

佐藤尚中先生歿後百年祭挨拶

有山 登

暦の上では七月一二日頃が梅雨明けということになって居りますが、今年は天候不良でありまして、今日は本梅雨模様の中を皆さんにお出頂き有難う存じます。

佐藤尚中先生が明治一五年（一八八二）年に五六歳で亡くなられてから今年で丁度一〇〇年になります。それで歿後一〇〇年祭を、日本医史学会と順天堂で共催し、蘭学資料研究会が後援する形で行うことになりました。祥月命日は七月二三日ですが、今年は金曜日に当りますので今日の土曜日に繰り上げた次第であります。尚中先生の宗教は神道でしたから、百年祭と致しましたが、祭と申しましても記念講演と資料展示によって先生を偲ぶ簡素な記念会ではありますが、講師の方々の顔振れから察すれば定めし実りの多い会になるであらうと思われまします。

私の役目は、以上の短かいご挨拶で済んだだけですが、持ち時間一〇分間がまだ余って居りますから、この機会に私が常々尚中先生について抱いている多くの疑問の一端を申し上げて皆さんのお教えを頂き度いと存じます。

順天堂佐藤三代のうち初代泰然、三代進両先生のごことは大体分っておりますが、二代尚中先生には分らない点が沢山あります。これは幕末、明治維新の国家大激動期に当って、様々の困難、複雑、または新しい場面に遭遇する毎に、先生が発揮した犀利極まる頭脳の働きに私達が付いて行けないからかも知れません。私が特に真相を知りたいのは、ドイツ医学

輸入が新政府によって未だ決定されていなかった明治二年の初めに進先生のドイツ留学を決心し、直ちに実行に移した時の尚中先生の胸中ではありますが、それを知る資料が順天堂医史学研究室にはないのであります。私が何故この疑問にこだわるかと申しますと、ドイツ医学採用は、わが国医学史上最大の出来事であると私は思っています。それ故、尚中先生がその時主役を演じた事情を正確、詳細に知ることは医史学的に甚だ重要であり、また順天堂としても是非知りたいところであるからです。今日の講師の方々が、時代と場所を変えて尚中先生のお話をなさる中で、私の疑問の幾つかが解けるであろうと期待しております。